

## パレスチナとクナーファとある日本人青年について 第七回（最終回）

富澤規子

### パレスチナ農業とアミン・アブアルソウド氏

山田氏のクナーファ修行には重要なキーパーソンがいる。パレスチナ渡航直前に知り合い、老舗菓子店を山田氏に紹介したアミン・アブアルソウド氏である。山田氏は彼を「パレスチナでの父親」「保護者」と呼び心から慕っている。

山田氏を献身的にクナーファ修行に導いたこの人物とは何者なのだろうか。



JICA プロジェクトの活動中にて、トバスの地元住民と。アミン氏(左から 5 人目)と大沼氏(左から 4 人目)。2012 年 10 月 24 日撮影。写真提供：大沼洋康氏。

アミン・アブアルソウド氏は JICA 現地スタッフとしての経験もある、農業開発の専門家である。

日本政府および関連団体はパレスチナ、特にヨルダン川西岸の農業開発に多大な協力をしている。その詳細の一例については、アラブ調査室 2026 年 1 月号掲載の国際耕種株式会社によるレポート「パレスチナにおける農業分野の技術協力」を参照して頂きたい。

現在、国境によってシリア、レバノン、パレスチナ、ヨルダンに分かたれたシャームもしくはレバントとも呼ばれるこの一帯は、長い歴史において常に奪い合いの対象だった。その理由の一つには、中東世界においては稀有な農業地帯である「肥沃な三日月地帯」の一部分であると言う、産業的な理由もある。

我々現代人は忘れがちだが、砂糖と言った甘味類は本来は希少な贅沢品だ。インドから中東に持ち込まれたサトウキビは栽培法の改善がされ、10 世紀にはメソポタミアを経てシャーム地方にまで伝わり、砂糖はこの地の高価な特産品の一つになった。シャーム

ム地方の文化的特徴として製菓産業をあげられるのは、このような農業史的背景もあると推測できる。

歴史的な産地としては、エルサレム王国（1099年～1291年）時代にエルサレム、エリコ、及びナーブルスを含む周辺域などでサトウキビ栽培が盛んだったと記録に残っている。それ以降もエジプトと並ぶ輸入元として周辺国からの関心は高かった。20世紀以降では中断された伝統農業の代替産業として、ガザでも生産されている。

パレスチナは戦火さえなければ、大きな農業生産を上げることが可能な豊穡で美しい土地だ。贅沢品である「菓子」を一つの文化として発展させることができたほどに、この地はかつて豊かだった。

アミン・アブアルソウド氏の仕事は、パレスチナを豊かな農耕地に戻すことだ。資源が限られた環境における農業の回復力と生産性の向上を目指した応用研究を専門としている。また、パレスチナ固有の在来種保護と回復にも力を入れている。国際連合食糧農業機関（FAO）のホームページによると、国際協力機構（JICA）パレスチナ事務所だけでなく、FAOの農業コンサルタントとしても活動していた。

現在はチュニジアのジェンドゥーバ大学（ESAK）博士課程に籍をおいているが、居住地と活動拠点はパレスチナのヨルダン川西岸在住のまま。移動制限や経済的圧力により日常生活と研究活動に非常に厳しい影響があるなか、博士論文執筆を進め、同時に地元農家を支援し、農業分野への影響を記録することにも力を注いでいる。

アミン氏は2011年から2015年までJICAが実施した「ヨルダン溪谷地域高付加価値型農業普及改善プロジェクト」に現地スタッフとして参加し、協力企業である国際耕種株式会社の大沼洋康氏と常に活動を共にしていた。大沼氏とアミン氏の親交は篤く、大沼氏が長年社長として勤めた国際耕種を後進に引き継ぎ2018年に退職した後も、アミン氏来日の度に旧友を温めあっているとのこと。

現在実施中のJICAプロジェクトは、2019年からの「市場志向型農業



ナーブルスの農業普及職員と共に。アミン氏(左端)と大沼氏(左から2人目)。2013年12月24日撮影。写真提供：大沼洋康氏。

普及主流化プロジェクト」だ。日本工営株式会社の協力のもと行われ、アミン氏はこのプロジェクトにも参加している。

山田氏は修行日程の後、帰国までの十日間をイスラエルとパレスチナ現地を活動拠点にする NGO を 4 団体ほど訪ねた。

その訪問先の一つが、アミン氏が参加する上記 JICA プロジェクトで、一日かけて日本工営の現地スタッフとの視察に同行している。



伝統農家を訪問するアミン氏。2023年2月15日撮影。

ヨルダン川西岸地区南端のヘブロン県の伝統農家を訪ね、パレスチナ在来種である黄色いカリフラワーの種子の取り方を聞き取り調査するのがその目的である。現在ではイスラエル産外来種のカリフラワーが出回っているが、いずれ在来種が主流に戻るよう回復させるためのヒアリングだ。

既に終了している他プロジェクトでは、アミン氏はラマッラーに昔ながらの固有在来種のみ市場を既に作っており、生産者からの卸しと小売りまでが整備済みである。地産地消を目指すことで、パレスチナ消費者のイスラエル依存を軽減させ、地元農家の安定収入確保が可能となる。

日本はこのような農業支援に長年協力しており、アミン氏は専門家として大沼氏をはじめとした多くの日本人と親密な交流を得ている。アミン氏は、突然紹介された日本人青年山田柊氏のために、修行先を手配し、危険のないよう助言し、身内も同然の気配りをした。アミン氏の親身な配慮は、農業関係の先人達がパレスチナと結んだ友誼が、巡り巡って山田氏にまで届いた結果のように見えるのだ。

ところで、アミン氏と大沼氏の友人関係が判明したのは、アラブ調査室に国際耕種の報告掲載が始まった今年1月に、室長武石礼司氏を通して知らされた全くの偶然だった。この偶然のおかげでアミン氏の為人をより深く知ることができ、人の縁と絆の不思議さには大変感動している。

## 土地を奪われないために

山田氏へのアミン氏の説明によると、農産業回復と農地拡大はイスラエルへの抵抗戦略の側面があるとのことだ。

日本国外務省ホームページのパレスチナ基礎データの2024年度を閲覧すると、主な貿易国はイスラエルであり輸出では約86%、輸入では約59%と依存度が大変高い。食糧自給を上げ、地産地消を強化することで、イスラエルへの従属からの脱却を狙える。

また、放牧地や空閑地を農地に転用することは、イスラエル入植者による土地接收への牽制になる。「入植者」という言葉の柔らかさにごまかされている感もあるが、彼らはイスラエル政府に黙認された略奪者であり、一般的な日本人の感覚では彼らの行いは無法者か反社会的勢力の犯罪行動に見えるだろう。当然、パレスチナ市民との衝突が頻発するのだが、イスラエル軍が守るのはこの入植者達であり、しかもパレスチナ国家治安部隊は入植者に対して反撃をしない。山田氏が乗車する友人の乗用車がナーブルスで投石を受けた時も、その友人は入植者の犯罪行為をパレスチナ当局に訴えても無意味だと話していたそうだ。

それほどまでにイスラエル人の土地収奪は頻発しており、一般市民は守られることなく、その抵抗に体を張っている。何もない荒地や放牧地のままにしておくと「入植者」に簡単に奪われるので、それを防ぐために農地を広げ、市民達は抵抗をする。

山田氏が帰国までの日程で訪れたもう一つの農業支援団体が、国同士ではなく市民同士での協力「民際協力」を唱える特定非営利活動法人パルシック（PARCIC）である。公式ホームページによると2016年より、イスラエルからの迫害により耕作放棄地を中心に、西岸地区での植樹を通じた環境保全や緑化事業を継続している。植樹される樹種はこの地を象徴する樹木であるオリーブが主だ。



植樹プロジェクトで植えられた若木。2023年2月14日撮影。

山田氏はパルシックと現地団体の共同プロジェクトにより行われた植樹会に参加した。場所はラマッラー郊外カラワット・バニ・ザイド村で、地元高校生も参加しレモンの木が植樹された。植樹式は教育的イベントだったようで、植樹の後は高校生も混じえて食事会で交流を楽しむ一幕もあったのだそうだ。

山田氏が交流を持つパレスチナ支援団体には、他にも農産品に関わる日本企業がある。2020年から雑貨輸入販売を展開する個人事業者で、事業者名は「架け箸」である。パレスチナを象徴する樹木であるオリーブは、パレスチナの農地全体の半分以上を占める900平方キロメートルほどの耕地で栽培され、農業GDPの大部分を占めている。そこから生まれるのが、架け箸が輸入販売する木製小物である。山田氏はこのパレスチナ渡航の際にも、架け箸の取り扱い商品を生産する現地団体を訪問している。

架け箸の経営方針としてフェアトレードがアピールされているが、アミン氏が語る「農業は抵抗戦略である」を聞くと、このような民間企業への見方が少し深くなる。企業が売り上げを伸ばすには、オリーブ増産が当然ことながら前提になり、それは入植者に奪われにくい農地を広げることにつながる。パレスチナの産業により近しく関わると言うこと、当事者であろうとすることは、イスラエルへの抵抗の一端に身を置くと言うことなのかもしれない。

## 帰国とその後

山田氏は修行先の菓子店に帰国の挨拶をして回り、また見聞を広げるためラマッラーとエルサレムの菓子店を巡りクナーファを食べ続けた。

ラマッラーでの修行地である「アルオマラア菓子店」「アブハムディ・クナーファ店」に帰国の報告をする。別れの挨拶は「また来るよ」とあっさりとしたものだったそうだが、実際、山田氏に



アミン氏のオフィスで別れのひと時。アミン氏（右）と山田氏（左）。2023年2月20日撮影。

も兄弟子達にも再訪は確実な未来であり、これから長い付き合いになると言う予感があつたのではないだろうか。

最後にアミン氏のオフィスを訪れ、次の渡航ではクナーファ生地工場や、チーズの生産現場を見れたらと話し合う。次回パレスチナ渡航の具体的な目的を話し合つての別れとなつた。

とにもかくにも、いよいよ帰国である。山田氏の日程は第三者の目から見ても濃密で詰込み過剰の感がある。疲労が蓄積していたようで、「やっと帰れる」と言うのが山田氏の正直な気持ちだったそうだ。そしてこの「やっと」の中には、やるべきことをやり遂げた充足感も含まれていたのだろう。

当初は現地の菓子職人と知己を得られれば程度の当てのない渡航計画のはずが、アミン氏と出会つたことで、すべきことが隙間なく入つた過密スケジュールとなつた。誰もが知る老舗店で修行し、アイコンニックな職人アブハムディ氏の息子であるかのような呼び名が付き、奪われる土地を守り抵抗する現場を見た。



修行の成果である「クナーファ・ナーイマ」。クナーファ屋メニューより。

なにより、修行の成果を早く日本へ持ち帰り、早くクナーファを焼きたいと言う意欲に急いでいた。習得したものを活かして次のステップへと言う点では、山田氏の次の修行地は「日本」だと、無意識に感じていたのかもしれない。

2023年1月24日にテルアビブに到着してから、2月22日に出国するまでの一ヶ月間で修行先は3軒、訪れた菓子店は17件、食したクナーファは30食以上である。頬は丸く、血色もよくなつての帰国であつたようだ。

まず山田氏が帰国してクナーファ屋の常連客の反応は「よく無事に帰ってきた」と言う安堵だったそうだ。山田氏のパレスチナ滞在中には、2月6日にトルコ・シリア地震が発生しており、日本語の中東報道は膨大な震災情

報で占められおり、他の情報は目に留まりにくくなっていた。

山田氏はインスタグラムに修行の様子をこまめに投稿していたが、滞在地での情勢不安については投稿していない。日本で待つ友人は渡航先が渡航先だけに気が気でなかっただろう。

山田氏は、不条理な現地の情勢を報告する役割は自分の役割ではないと割り切っていたところがあったと当時を振り返る。クナーファ屋を始めた頃から不正義一般へ抵抗意識はもちろんあったのだが、同時に国際協力へのあり方への疑問から始めたのが製菓業の道でもある。パレスチナの惨状を知ってもらうために「まずはクナーファを好きになってもらうこと」を前面に押し出した営業方針が、インスタグラムの投稿に反映されていたのだろう。しかし、今現在ならば遭遇したイスラエルの暴虐も投稿するだろうと、彼は心情の変化を語っている。

インスタグラムの帰国報告は2023年4月4日である。

この投稿で今までのメニューに加えて、ナーブルス独特の挽いた生地による「ナーイメ」を提供すると告知した。「ナーイメ」と「キシユナ」の区別が明確になったのは現地修行の大きな成果の一つだ。山田氏が修行した2023年冬の時点では、日本語でのクナーファの説明はトルコ食文化からの発信が多く、ナーブルス発祥の「麺状の生地を挽いた」クナーファの説明はまだ充分ではなかったのだ。

富士見トンネルの店内には、修行の様子を撮影した写真が飾られミニギャラリーになっている。引き延ばしをしていない小さな写真だが、富士見トンネルのそっけない打ちっぱなしの壁には、その小ささ故に目を引きつける展示となる。客はイスから立ちあがり、その写真の前に歩みよってキャプションを読む時、少しだけパレスチナが身近



国立市谷保、富士見台トンネルで営業する「クナーファ屋」の壁面。  
2024年1月31日撮影。

になる。しかも撮影されている人物達は山田氏の友人や師匠、兄弟子達だ。彼らはメディアで報じられる情報の一部ではなく、今もどうしているだろうかと山田氏が懐かしみ心配をする親しい人々だ。

クナーファ屋で使用される皿は山田氏がヘブロンで買い付けた品だ。ヘブロンは陶器をはじめとした伝統工芸品で有名な工業都市であり、これもパレスチナへ関心を向ける糸口になる。富士見トンネルで水曜日に営業するクナーファ屋には、パレスチナを想起させるものが自然に店内に馴染んでいる。



ヘブロンで購入した皿。2023年2月15日撮影。

コラボレーションも増えた。それは支援関係の企画あれば、支援とは全く関係のない企画もあるが、いずれもパレスチナを紹介する機会になる。クナーファ屋の営業は、富士見トンネルの通常営業も企画営業も順調に日々を重ねていった。しかし、そこに水をさす未曾有の人的危機が起きる。

2023年10月7日に開戦され、いまだ終息の見込みが立たないパレスチナ・イスラエル戦争がそれである。山田氏にとっては懐かしい人々、絆を結んだ人々が、まさにその渦中にさらされているのだ。

## 10月7日と山田氏の変化

山田氏は11月29日に特定非営利活動法人日本国際ボランティアセンター（JVC）によるパレスチナ支援の募金箱を置いた。当時は気持ちが揺れている中の設置で、自信を持って募金箱を置いたという心境ではなかったそうである。と言うのも、山田氏の胸中で「イスラエルへの抵抗」についての考え方の変化が生じてはいたものの、変化しきっていないタイミングで、10月7日の2023年パレスチナ・イスラエル戦争が勃発してしまい、心情の整理ができていないままの募金箱だったからだ。

山田氏の修行前の姿勢は「まずはクナーファを好きになってもらうこと」だった。それぞれが個人の嗜好や繋がりによって、支援や抵抗運動といった活動をする必要があるだろうと考えていた。パレスチナの例でいえば「クナーファが好きだから、あるいはパレスチナ人と友達だから、イスラエルへ抵抗する」という形だ。活動家からの呼びかけ

ではなく、主体的にもしくは自発的に何がしかのアクションをするのが好ましく、クナーファはそのきっかけになればいい。

この考え方に沿うと「募金箱を置く」というのは、山田氏にとっては直接的な支援や抵抗への呼びかけになるので、変化前の価値観ではあまりやりたくないことだったと本音をもらした。しかし、10月7日の惨事は心情変化の過渡期に起きており、そこで友人から募金箱設置を誘われたため、その誘いを断るほどの根拠を変化前の価値観から見いだせなくなっていたので断らなかった、と言うのが山田氏の正直な気持ちだそうだ。

10月7日以降の惨状は、山田氏にとってそれまでの姿勢や理念を揺るがせる甚大な危機だった。あれほどの残酷な出来事が起きている中で、それでも個々人の好みによって抵抗していくのが良いとする態度はとても維持できなかつたと、山田氏は語る。パレスチナの被害とイスラエルの暴虐へ対する、日本国内で起きた様々な反応と実際の活動に移した人々に触れながら、そしてその関心の延長線上で「今まさにとてつもない被害を受けている地域のお菓子を、被害を受けていない場所で作っている立場」としてどのように振る舞うのがより良いのかと常に考えるようになった。パレスチナへの支援や寄り添い、イスラエルへの抵抗や抗議について、より深く熟考する過程で、山田氏の意識や心情は大きく変化していく。

1948年のイスラエル建国宣言から生じた「ナクバ（大惨事）」以来、パレスチナは土地収奪や強制移住、民間人の大量虐殺といった筆舌しがたい人道的危機にさらされ続けている。「2023年10月7日」以前では、2008年から2014年にかけてイスラエル国防軍とハマースが軍事衝突したガザ紛争とガザ侵攻での被害が著しい。パレスチナ側の犠牲者の多くが無差別攻撃による一般市民であり、被害はガザだけでなくヨルダン川西岸域にまで大きく及んだ。

山田氏が2015年シリア内戦の報道で中東での人道的危機に関心を持った時、彼はまだ高校生だった。彼がパレスチナをはっきりと意識した時期が2022年3月、大学を卒業する頃に初めて「パレスチナ」という言葉が山田氏の日記に現れる。

2023年10月7日からのパレスチナ・イスラエル戦争は、山田氏にとってはリアルタイムで直面した最初の大規模な人道的危機だ。2014年以来の未曾有の惨事であり、そして山田氏はこの惨事直前のかろうじて小康状態を保っていたぎりぎりの日常を、兄弟子達と共にすごしたパレスチナの当事者なのだ。実際にすごした風景と、報道される現地の惨状との落差は、どれほどの驚愕と痛み、動揺を山田氏に与えたかは計り知れないものがある。帰国後もアミン氏との親密な関係は続いており「西岸はまだ無事」と連絡があったが、それは山田氏を不安にさせないための気遣った言葉かもしれず鵜呑みに

はできなかつただろう。この惨事と不正義に対して普遍的な義憤だけでなく、身内への心配と言う極当たり前の感情が山田氏の胸中に沸き起こっていたのだろうことは想像にやすく、当時まだ二十代半ばだった日本人青年には、パレスチナの当事者であると言うのは余りにも酷な状況だったように見える。

この考え方の変化を経て、これほどの残酷な不正義への抵抗が「クナーファが好きだから」といった個人的嗜好を根拠に自発に委ねることは不適切ではないと考えるようになった。この考え方に頼る限り「クナーファが好きではないから、あるいはパレスチナ人と友達ではないから、自分は抵抗しない」という言い分が通り、逆に「抵抗するならば、パレスチナの人々と仲良くしてパレスチナの文化を好きでなければいけない」という不必要な使命感が生じる弊害を山田氏は懸念している。つまりパレスチナに関わるための過剰な負担を感じた結果、尻込みあるいはドロップアウトする可能性に気づき、それを憂慮するにまでに彼の考えは変化している。誰もかれもが山田氏のように、人道的危機にさらされる地と直接関われるわけではないのだ。

山田氏は不正義への抵抗という文脈では「個々人の嗜好性や親しみからの間接的なアプローチ」を目指しておらず、今は「パレスチナと親しいクナーファ屋」として批判するという構図にはならぬように注意しているそうである。つまり「パレスチナを好きな自分」と「イスラエルを批判する根拠」を明確に分けることによって、イスラエルの不正義に対する批判が的確になると考えるようになった。山田氏がパレスチナに親しみを持っていることは確かであり、顧客がクナーファやパレスチナ文化に親しみを持ってくれたら嬉しいが、それは山田氏の個人的かつ商業的な欲求であり、イスラエルの暴虐に対して人として湧きおこる義憤や無私の怒りとは別のものなのだ。

こうした考え方を「心情的にパレスチナに近いと見られているクナーファ屋の立場」で開示することにより、パレスチナを支援しイスラエルへ抵抗していきたいと考える人々へのアプローチのハードルを下げながら、クナーファ屋を営業したいのだそうだ。

今もクナーファ屋のキャッシャーには、クナーファのメニューと募金箱が並んでお客を迎えている。

### パレスチナとクナーファとある日本人青年について

ところで私事を差し込むようで恐縮だが、私は無類のクナーファ好きだ。エジプト暮らしでクナーファ三昧な一方、一時帰国中は途端にクナーファに飢える羽目になる。

ところが2024年夏、帰国後に「クナーファ／東京」で検索してみると、国立市谷保の「クナーファ屋」が検索の1ページ目に突如浮上したのである。どうやら2023年のクナーファ修行以後、山田氏の「クナーファ屋」に注目が集まり検索上位に表示されやすくなっていったらしい。

さっそく「クナーファ屋」を訪れて、最初に頼んだのはエジプトのクナーファに一番外見が近い「キシユナ」だ。焼き立てがびっくりするほど美味しくて、追加で「ナーイメ」も注文した。ナーイメとキシユナは伝統的なナーブルス・クナーファを模したクナーファ屋の固定メニューである。チーズに残る塩加減とシロップのバランスがなんとも日本人好みで繊細でうっとりする塩梅だった。

二週間後に足を運んだ時は、店内でナーイメを食し、そして創作クナーファ「ラムレーズン」をテイクアウトした。エジプト暮らしでは想像もできない「クナーファにラム」の組み合わせ。山田氏が試行錯誤の末に作り出した新しいアレンジのうちの一つである。ザックリしたクナーファを噛むと生地にしみ込んだラムがわずかに揮発するのか、シロップに含まれたバラ水の香り後をラムの香りが鼻腔の中から追いかけてくる。初めて食べる絶妙な風味に「あの青年はまだ若いのに天才じゃないだろうか」と感動し、完全に山田氏の焼くクナーファの虜になったのだ。

こうして水曜日にはクナーファ屋へ通う習慣がつき、山田氏から聞くクナーファ修行がとても興味深いので、ますます足が向くようになった。

そして山田氏とクナーファ屋について誰かに教えたくなった。正直に言うと、初めはお客がもっと増えれば営業日も増えて、もっと山田氏のクナーファを食べられるだろうと言う食レポ的動機からだ。取材申し込みをどうやって切り出そうかと探りながら、修行時代について少し踏み込んだ質問を試みる。すると菓子職人としての顔の下に、支援家としての理想を模索するもう一つの顔が彼にはあるのだと次第にわかってく



「クナーファ・キシユナ」。クナーファ屋メニューより。

る。国際協力の在り方に疑問と葛藤を持ち、当事者として継続的関りを持ちたいと望み、そこから生じたのがこの絶品なクナーファだと言うので何度も驚いた。



「ラムレーズン・クナーファ」。クナーファ屋メニューより。

人道的危機にさらされるパレスチナで、今なお盛んに作られる伝統菓子「ナーブルス・クナーファ」について、その修行のために果敢にもパレスチナへ渡った日本人青年について、この人物の物語をもっと聞きたい。クナーファ屋のカウンターでクナーファを食べながら「取材させて頂けませんか」と申し込んだ。山田氏は面食らったようだが、取材を承諾してくれた。

山田氏から取材した内容をもとに、背景となるナーブルスの風土や当時の関連事件を調べる。アラビア語メディアのアーカイブを詳細に調べると、山田氏のたった一か月の滞在期間に、イスラエル軍による迫害やイスラエル人入植者の侵略は頻発していた。山田氏と職人達の血の通ったエピソードと、全てを奪おうとするイスラエルによる蹂躪は常に同時進行だった。山田氏のクナーファについて語る時、パレスチナが受けている人道的被害について切り離すことが絶対にできないのである。

山田氏は学生団体を離れてクナーファを焼き始めた時、クナーファを通してより多くの日本人にパレスチナに興味を持ってもらえないだろうか考えた。それも運動家からのアピールでなく、クナーファを食べた客が能動的にパレスチナへを知るきっかけになればと始めたのがクナーファ職人の道だ。食文化に興味をもつ日本人は多いから、クナーファによってパレスチナへのアプローチを広げられると期待したのである。とすると私は山田氏の見込み通り、美味しい菓子をきっかけに興味を持ち、自らパレスチナについても調べた一人になったと言うことになるだろうか。そしてこの山田氏の物語を読んでもくれた人が、10月7日以降の惨事を経て、尚もパレスチナへ真摯に向き合う彼の視点を通し関心をもってくれれば、パレスチナへのアプローチはより大きく広がっていくだろう。

パレスチナへクナーファ修行のため渡った日本人青年について私は取材した。たった一か月の修行は、大望を抱えた一人の日本人青年をパレスチナの当事者にするに足る通過儀礼のような修行だった。

この日本人青年の名は山田柊、あるいは「シュウ・アブハムディ」と言う。

#### 【山田柊（やまだしゅう）氏略歴】



1997 年生まれ。シリア内戦や難民危機の報道に触れてアラブ地域での国際協力のキャリアを志すも、「社会正義」の正当性やモチベーションの在り方に疑問を持ち、クナーファを焼き始める。現在は、国立市の谷保で週に一度の「クナーファ屋」を営む。2023 年の 2 月にパレスチナでの修行を経て、伝統的なレシピと生活に寄り添うお店の佇まいを学んだ。

(写真提供：クナーファ屋店主 山田柊氏)

富澤規子（とみざわのりこ）

Ahram Canadian University (エジプト)言語翻訳学部日本語教師。エジプト文化省立大学校アカデミー・オブ・アーツ大学院にて民俗学準修士号取得。クナーファ屋店主山田氏を取材した執筆に『季刊アラブ』2024 年秋号 189 号掲載「クナーファでつながるパレスチナ」がある。いたばしボローニャ絵本館翻訳おはなしボランティア。おはなし会シリーズに 2015 年から「アラブのヤシの木（新宿区立大久保図書館主催）」講師。